

# よ

## 世の中に 絶えて〈ずこう〉の なかりせば

Keyword: 美術力, 脳力, 人間力



“世の中に 絶えて〈ずこう〉の なかりせば”が上の句であれば、下の句は当然のことながら“アフ還(曆)のこころ のどけからまし”となります。それにしてもなぜ、私を悩ませる美術教育が学校等に「在る」のでしょうか。私なりの「解」は美術力形成への貢献以外にありません。

では「美術力」とはなんでしょう。「感じる力(Heart/感性, 感受性, 感覚, 感情, 興味, 関心等)」、「考える力(Head/知性, 知恵, 知識, 発想力, 構想力等)」、「みる・かく・つくる力(Hand/技術, 技能等)」の総和と私はとらえています。どの力のひとつをとってみても美術と無縁ではありません。のみならずこの3つの力はどれもが「人間力」の基礎ではないでしょうか。だからこそ美術教育は学校に「在る」べきと私は考えるのです。

さて、ではその「3つの力」はどのように獲得させることができるのでしょうか。このこと、決して難しいことではありません。すなわち可能な限り多く、広く、深く、「感じ・考え・みる・かく・つくる」チャンス子どもたちに提供することと考えています。言葉をかえれば五感覚総動員、脳フル稼働状態を引き出すダイナミックな造形(美術)環境<sup>1</sup>の整備です。これは教師の思惑を具現するための指導(見栄えのする作品を描かせるために「カタツムリの線」などと線描を誘導する等々の実践)などとは一線を画し、常に子どもたちの「内発的動機」<sup>2</sup>に支えられた指導内容や方法を求め続ける姿勢をさしています。

人が森羅万象からなにかを「感じる」ことができるのは脳によります。人がなんらかの問題に直面しあれこれ「考える」ことができるのも脳の営みです。言うまでもなく「みる・かく・つくる」ことができるのも脳の働きがあるからです。かく人の営みのすべてが脳に由来し、ここでは、脳≒人との図式も成立します。すなわち「美術力」の形成は「人間力」に連鎖するのです。この文脈こそ、子どもたち、そして学校に美術教育が不可欠だろうと私が考える根拠です。表現力や情操レベルにとどまりません。むしろこの文脈(脳形成)が保障されないような美術教育であれば即刻学校等から排除されても私は惜しみません。脳形成に貢献する美術教育こそ「美術による教育(Education through Art)」、「美術の教育(Education for Art)」の本道なのです。

\*1 若元澄男「図画工作科における造形環境に関する一考察」,美術科教育学会,美術教育学第16号, pp.353-363, 1995.3.

\*2 「わ」の項で紹介した私の名刺における記述及び裏面の3者の関係図式

